

編集をおえて

私は、昨年にひきつづき『フォーラム』の編集のしごとに携わった。内容をご覽ただくとおり、本年もじつに多岐にわたったものである。すなわち、恒例となっている全カリに関わる「公開シンポジウム」にくわえて、今年度はじめて「授業評価」を特集としてとりあげた。ほかにも学生の取り組み状況や表情が文面から伝わってくるような「英語同時通訳法」の授業に参加し、実際の公開講演会に同時通訳者として臨んだ学生のレポートは興味深い。また学生の間で人気の高い「人権問題に関する公開特別授業」や、課外教育活動「教育実践としてのスリランカ交流キャンプ」など、海外・人権・NGO・ボランティアが学生のインセンティブをあつめている。この公開特別授業には、私も昨年度と今年度2回とも学生と一緒に聴かせてもらって、学生の関心の高さを目の当たりにした。そこには上記のようなテーマにかかわる諸要素にくわえて、「授業外」ないし「授業からはみ出し」という共通要素が含まれていることを見逃してはならないように思う。

他にも「英語教育セミナー」における報告論稿をご寄稿していただいた方々にお礼申し上げます。

さらにつぎの二つの寄稿についてふれておきたい。

ひとつは、所一彦氏の「全カリの組織」である。全カリ発足時から3年にわたる部長経験をとおして得られた知見、意見・感慨が紹介されている。今年度をもって定年退職される氏はこれを「遺言」とおっしゃる。全カリ運営センターを「革命政府」とみなす大胆な分析は「全カリ改革」問題の何たるかを私たちに突きつけている。私もここ2年運営委員会でご一緒させていただき、激務のなかにあってユーモアをわすれないお人柄に接するにつけ、楽しく仕事をさせていただいた。ご苦労様でした。

もうひとつは、佐々木一也氏の「学生に学んで授業を創る」である。ここで梗概を紹介する余裕をもたないが、FDの可能性や必要性が力説強調されているが、スローガンとしてではなく、その所以や根拠を浮き彫りにした分析は示唆に富んでいて教わるところが多い。ぜひとも一読ねがいたい。

最後に、私ごとであるが、2年間の全カリ運営委員のしごとを終えるにあたって一言。

ハナキンの夕方、教授会を途中で抜けて、武蔵野新座キャンパスからの出席はなかなかきつかったが、着任早々「立教シャワー」を浴びることになった。良かったかどうかはわからないが、学ぶところが多かったことは確かである。感謝。(T.O)